

三島由紀夫『金閣寺』論

——主人公から見た「美」について——

はじめに

三島由紀夫の『金閣寺』は昭和三十一年一月から十月まで雑誌「新潮」に連載されていた。翌年には第八回読売文学賞を受賞している。昭和二十五年七月二日未明、鹿苑寺の徒弟・林養賢による放火事件を題材としている。林は放火の後、寺の裏山へ行方を眩ましカルモチンの大量摂取並びにナイフでの自傷行為で意識が朦朧とする中、鹿苑寺の清掃員に発見され、駆け付けた警察官による逮捕へと至った。しかし、『金閣寺』内はで主人公・溝口による放火後の行動が以下のように書かれている。

ポケットをさぐると、小刀と手巾に包んだカルモチンの瓶とが出て来た。それを谷底めがけて投げ捨てた。

別のポケットの煙草が手に触れた。私は煙草を喫んだ。一ト仕事を終へて一服してゐる人がよくさう思ふやうに、生きようと私は思った。

上田 茜

溝口は何故、放火の末に「生きよう」と思ったのだろうか。また、この文章は『金閣寺』を締めくくる文章でもある。

溝口による金閣寺を燃やす行為は何故起こったのだろうか。それには、作中に登場する「美」が関係していると考えられる。『金閣寺』には「美」についての記述が多くあり、その場合は主人公の溝口が金閣を目の前にした時や終戦後、寺を燃やす場面などである。三島は創作ノートの中で作品の主題として「美への嫉妬」(『決定版三島由紀夫全集6』591頁)を挙げているのだから「美」についての記述は自然と言えるだろう。ただ、溝口には「美」に対しての異常な執着や陶醉が見られる。溝口が心酔する「美」とは一体何だろうか。『金閣寺』の本文中にはこのように書かれていた。

美が金閣そのものであるのか、それとも美は金閣を包むこの虚無の夜と等質なものなのかわからなかつた。おそらく美はそのどちらでもあつた。細部でもあり全体でもあり、金閣

でもあり金閣を包む夜でもあつた。(中略) 一つ一つのこゝには存在しない美の予兆が、いはば金閣の主題をなした。

この言説は溝口が放火の直前に、数年悩んだ「美」についての考えを纏めたものである。明確な答えを導き出してはないが、溝口の中で〈想像の金閣〉が大きくなるにつれて、〈建築の金閣〉が障碍になることが理解出来る。〈建築の金閣〉を凌駕していく〈想像の金閣〉とは一体どのようなものだろうか。

そもそも、溝口はいつから金閣に対して美しいという特別な感情を、他の人間に比べて異様な形で抱くようになったのだろうか。金閣の美しさに対する溝口の心情の変化を分析していく。

そして、作品を読み進めると分かることであるが本文中の「生」という言葉には二つの意味があると考えられる。一つ目は生 (Life) の意味で二つ目は性 (Sex) の意味であるが以上にについては後述の美しさの変遷で理解して頂きたい。

一 物理的接近による変化

写真や教科書で、現実の金閣をたびたび見ながら、私の心の中では、父の語つた金閣の幻のほうが勝を制した。父は決して現実の金閣が、金色にかがやいてあるなどと語らなかつた筈だが、父によれば、金閣ほど美しいものは地上になく、又金閣というその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであつた。

溝口は亡き父親が語る金閣の姿から、下宿先である舞鶴の勉強部屋を通して見える景色に金閣を想像することや、美しい顔の人を見て「金閣のやうに美しい」と形容するようになっていた。中学生の溝口の中では父親からの影響で、金閣＝美しいものであり、美しいもの＝金閣、が成り立っていた。父親は東舞鶴志楽出身で、懇望され僧となり成生で住職になった。肺に病を抱え、最期は夥しい咯血と共に亡くなっている。そんな父親と溝口は二人で京都市内まで足を運び、金閣寺を目にした。この時が溝口にとって初めて金閣寺を見た瞬間であつた。病弱な父親から溝口に対して、厳しさや威厳を感じることは難しいが、「金閣ほど美しいものは此世にない」と言う父親の影響を受けているのは確かだ。父親の言葉が力を持つ理由には以下が挙げられるが、母親と親戚の男の不貞を目撃した際に父親が溝口の目を掌で覆つたことである。家族が同じ蚊帳で寝る中、見えたのは地獄であり、怖ろしい世界であつた。そのような状況を大きな掌で覆い隠した父親の行動は、溝口にとって父親を信じる大きなきっかけと言えるだろう。また、この時から母親は裏切り者に、父親は絶対性を持ち合わせる者として位置付けられた存在となつた。その為、父親が美しいと語つた金閣寺は美しいものとして確固たる存在となり、溝口が触れて良い情報か否かを判別する父親は絶対者、或いは絶対者の通訳となり得るのではないだろうか。父親が溝口に金閣の美しさを語らなければ、「美」という問題にぶつかり苦しまなく

て済んだのである。
父親に連れられて初めて金閣寺を見ることになつた溝口として

は「どうあつても金閣は美しくなければならなかつた」のである。しかし、「あれほど夢みてゐた金閣は、大そうあつけな」ものであるが分かる。期待し過ぎるのも無理はないだろう。世界で一番美しいものとして理解している金閣寺は美しくなければならぬはずであつた。その点について酒井順子は「彼が実際に金閣を見た時に美しいと思うことができなかつたのは、ありていに言えば「期待しすぎたせい」ということになる」（『金閣寺の燃やし方』200頁）と述べている。だが、ここで念頭に置くべきなのは、国宝建築として価値がある（建築の金閣）の美しさを求めている訳ではないことである。父親を正当化する為には、教えられてきたことが間違っていないと証明する必要があつた。それゆゑに金閣に美しさを求めているのだ。

そして、金閣を美しく感じられなかつた溝口はある決心をしてゐる。

もつと金閣に接近して、私の目に醜く感じられる障害を取除き、一つ一つの細部を点検し、美の核心をこの目で見なければならぬ。

溝口は性という醜い障害を排除し、クリアになつた視界から「美」の点検を行い、自分にとつての「美」とは何なのかを明らかにしていくことを決意したのである。やがてこれは、溝口の人生においての目標となる。

最初に金閣を見た日から数ヶ月後（建築の金閣）と溝口は物理的に近い距離になる。父親が自分亡き後、金閣寺の徒弟になるよう遺言を残し、寺の老師にも話をつけていた。父親が溝口に金閣寺について教え、近づけた張本人であることが理解出来るだろう。美の核心を見る為に物理的距離は詰められたものの心理的距離はまだまだであつた。心理的にも接近する為の最初の一步として、溝口は金閣寺に対してこのように呼びかけている。

『金閣よ。やつとあなたのそばへ来て住むやうになつたよ』と、私は箒の手を休めて、心に眩くことがあつた。『今すぐでなくてもいいから、いつかは私に親しみを示し、私にあなたの秘密を打明けてくれ。あなたの美しさは、もう少しのところではつきり見えさうでゐて、まだ見えぬ。私の心象の金閣よりも、本物のはうがはつきり美しく見えるやうにしてくれ。又もし、あなたが地上で比べるものがないほど美しいなら、何故それほど美しいのか、何故美しくあらねばならぬのかを語つてくれ』

徒弟になつた直後においては相変わらず、あつけない（建築の金閣）と日ごとに美しさが増す（想像の金閣）の対立構造が成り立っている。だが、この段階で溝口は（想像の金閣）の方が、（建築の金閣）より美しいことに納得出来ず、（建築の金閣）が美しく見えているのだ。

何故、（建築の金閣）がはつきり美しく見えなければならぬ

のだろうか。理由は二点考えられる。一点目は死んだ父親が「金閣ほど美しいものは此世にない」と語っていたこと、二点目は昭和十九年という時代背景である。

一点目は先述のように、父親が語っていたことが間違っていないと証明する為である。正当化する上で根拠を持つ為には（建築の金閣）が美しく見えて欲しかったと考えられる。しかしながら、死により父親から絶対性が喪失したとすれば、絶対性を持ち合わせる者を復活させる為の行動とも捉えることが出来るのではないだろうか。

二点目は、戦争により世情不安が高まっていたからである。溝口は「もともと金閣は不安が建てた建築」と考え、戦時中の金閣寺に対しては「戦乱と不安、多くの屍と夥しい血が、金閣の美を富ますのは自然であつた」と述べている。溝口が生きている世の情勢と金閣寺が建てられた時代背景を重ね合わせていることから、（建築の金閣）は美しく見えなければならないのである。この時期の日本は既にミッドウエー海戦でアメリカ軍に大敗し、ガダルカナル島での戦いでは多くの戦艦を失うなどの痛手を負い、学徒出陣が始まり、特攻隊による攻撃が開始される直前であった。

そもそも、（建築の金閣）は正式名称を鹿苑寺と言い、相国寺の塔頭寺院である。舍利殿の金閣が有名な為に金閣寺と呼ばれており、鎌倉時代の貴族の別荘を将軍を退いた足利義満が譲りうけ、別邸北山殿に造り替えた建物である。特に趣向を凝らした舍利殿は第一層を寢殿造風、第二層を住宅風、第三層を禅宗仏堂風

に造られている。公家文化・武家文化・仏教文化が調和した北山文化を代表する建物であり、義満の権威と王朝への憧れを示している。だが、將軍家の権威の衰退と共に経済的にも落ち込んでいった。また、応仁の乱で多くの禪寺が被害にあつたが運良く金閣寺は焼失を免れている。

溝口は金閣寺が美しくある為の条件としてこのようなことも述べていた。

夜空の月のやうに、金閣は暗黒時代の象徴として造られたのだつた。そこで私の夢想の金閣は、その周囲に押しよせてゐる闇の背景を必要とした。闇のなかに、美しい細身の柱の構造が、内から微光を放つて、じつと物静かに坐つてゐた。人がこの建築にどんな言葉で語りかけても、美しい金閣は、無言で、繊細な構造をあらはにして、周囲の闇に耐へてゐなければならぬ。

そして、戦争が激しくなるにつれて溝口の中で次第に「金閣が灰になることは確実なのだ」という考えが生まれていく。金閣の「悲劇的な美しさ」は増していくばかりである。灰になること＝焼失し跡形も無くなることを予想し、その中に溝口は美しさを見出している。だが、この灰になる＝焼失し跡形も無くなるという考えは溝口だけが持っている思考で、他の登場人物にこの考えは浮かない。母親に至っては京都に空襲は来ないと断言している。京都に大空襲が起こることや金閣寺が戦禍により無くなる

ことはあくまで溝口の想像である。溝口にとっては、灰になることと焼失し跡形も無くなることへの大きな期待を孕んでいるものを（想像の金閣）と言える。既に、この時点で本人は自覚していないが（建築の金閣）よりも（想像の金閣）が勝っているのである。

また、灰になることと焼失し跡形も無くなることは絶対の崩壊を意味している。父親が美しいと語った金閣が灰になり焼失することは物理的な崩壊と同時に、心理的な「悲劇的な美しさ」への変容も考えられる。溝口と父親の金閣に対する「美」への感度が大きく異なることが分かるだろう。溝口から見れば「美」が変容する為に必要な物理的崩壊と言える。

それから終戦までの一年間が、私が金閣と最も親しみ、その安否を気づかひ、その美に溺れた時期である。どちらかといへば、金閣を私と同じ高さにまで引下げ、さういふ仮定の下に、怖れげもなく金閣を愛することのできた時期である。私はまだ金閣から、悪しき影響、あるひはその毒を受けてゐなかつた。

美に溺れたという事実から、灰になり焼失する可能性を秘めた（建築の金閣）を通して溝口が（想像の金閣）段々と支配されていく様子がありありと分かる。金閣に魅せられ、特別な感情が表れ始めている。金閣には異常な「美」を感じる一方で、溝口は自分のことを醜いと認識している。特に、有為子と対峙した際に色

濃く現れている。

有為子とは、中学時代を過ごした舞鶴の家の近所に暮らしていた美しい娘である。溝口にとっては残念な出来事だが、彼女は脱走兵との間に子供を身籠り駆け落ちの途中で殺されるのだ。溝口はこの様子を目撃していた。

主人公の溝口は吃音症を抱えており、大きなコンプレックスの一つとなつている。溝口は彼女が見つめる吃りの口を「晁闇のなかに、無意味にうごめいてゐる、つまらない暗い小さな穴、野の小動物の巣のやうな汚れた無恰好な小さな穴」と比喩している。ここまで自分を卑下する理由は外見が醜いほど自分が格別な存在だと思えるからだ。見た目に負い目を感じる一方で「自分はひそかに選ばれた者だ」と考えている。

ここでもう少し有為子について述べていく。彼女はおそらく溝口が初めて生について考えるきっかけになつた人物である。中学生の溝口は毎晩彼女の体を思い続けていた。その後、亡くなり実在しない有為子の姿を見かけたと言っている。

一度目は友人と南禅寺を訪れた時である。天井画や釈尊の像を堪能した二人は楼上から天授庵での逢引を目にした。女性は華美な長振袖で白い横顔は本当に生きているか疑うほどであり、男性は若い陸軍士官であつた。女性がお茶を勧めるが、男性は一向に口にせず何かを呟き、女性はうなだれてしまった。その後女性は振袖をはだけさせ片方の乳房を両手で揉み、男性が持つ茶碗の中に母乳を入れたのである。すると男性はそのお茶を飲み干した。溝口はこの女性を生き返つた有為子だと執拗に思っている。二度

目は遊郭を訪れた時である。有為子がこの場に隠れ棲んでいると空想し、亡くなった為此の世では会えないはずだが、今は留守にしているから会えないだけだと考えていた。溝口からすると彼女は永遠の存在なのだ。

極めつけには「私は思ひ出せぬ時と場所で、(多分有為子と)、もつと烈しい、もつと身のしびれる官能の悦びをすずに味はつてゐるやうな気がする」と述べている。

それから、女性による影響の点で言えば母親からも多大な影響を与えられている。母親は「美」に溺れている息子に対して跡取りになれば金閣寺が手に入るだろうと唆していた。この時、母親は父親の命日にお経をあげてもらう為に図々しくも金閣寺を訪ねて来た。寺の跡取りになるという野心を持たせる他に、実家を売ってしまったことを告げている。息子が寺の後継になれば母親自身の生活は安泰であり、実家を売ることで父親の治療費の借金を返済して身軽にもなっていた。そして、一九四五年八月十五日、溝口は絶望し金閣は永遠を主張し始めることになる。

二 戦後からの変化

敗戦の衝撃、民族的悲哀などいふものから、金閣は超絶してゐた。もしくは超絶を装つてゐた。きのふまでの金閣はかうではなかつた。とうとう空襲に焼かれなかつたこと、今日からのちはもうその惧れがないこと、このことが金閣をして、再び、「昔から自分はここに居り、未来永劫ここに居るだらう」という表情を、取戻させたのにちがひない。

本当に「超絶」していたのだろうか。確かに〈建築の金閣〉は敗戦の衝撃が残る市街では超絶して見えるだろう。溝口から見る金閣は一九四五年八月十五日が今まで接した中で一番美しかったのである。

溝口は金閣の変容により、自身との関係が変化したと考えている。実際は金閣の方ではなく、溝口の中で〈想像の金閣〉が占める割合が増えた為に変化したのである。昭和二〇年八月十五日を境に、母親の唆しにより老師と同じ立場になる可能性を会得している点、終戦により空襲が起こり、金閣寺が灰になること、焼失し跡形も無くなる想像が現実にならない点が異なっている。

〈建築の金閣〉は溝口にとつて、何も起こらず永久に存在するつまらないものとなった。反対に人には死という終わりがある。溝口はそれについて身を持って知っている。経験の一つは、やはり父親の死であろう。葬式に参列し、棺に横たわる父親を見て自身の生を自覚している。もう一つ、経験を挙げるならば娼婦を墮胎させたことである。

溝口が意図的に身籠っている女性を墮胎させたのではなく、金閣寺を訪れていた米兵が連れの娼婦と口論になり、「踏め。おまへ、踏んでみろ」と命令されたのである。最初は躊躇って踏んだものの、次第にそれは喜びに変わっていった。墮胎させた事実は後に知るが、生を瞬間的に終わらせることを会得している。人間は「永遠的」ではなく、案外簡単になくなる「一回的」なものであるのだ。

また、敗戦の空気が漂う中で金閣に対して美しさをさほど感じ

ておらず、以前の溝口から考えると（想像の金閣）に思いを馳せることは抑えられている。これは（建築の金閣）がつまらないものになったからであろう。

ところが、柏木という一人の男と出会うことにより溝口の中の（想像の金閣）は、さらに大きな力を宿し段々と悪しき影響・毒を与え、溝口を支配していくのである。柏木とは進学先の大学で出会う同級生である。彼との出会いは溝口にとって衝撃的であった。柏木は内齷足であり、独りで過ごしていることが多かった。

そして内齷足であることが吃音症を抱える溝口の安心材料となった。しかし、柏木は初対面の溝口に対して、「何を言ってるのかわからん。吃つてばかりゐて」や「君は自分を大切にすぎてる。だから自分と一緒に、自分の吃りも大事にしすぎてゐるんぢやないか」と言葉を吐いている。挙句に吃音症の溝口へ向かって「吃れ！ 吃れ！」と面白そうに言い、自分がどのようにして童貞を脱却したかを話し始めた。一通り話を終えた柏木は、内齷足の男性を好きになる女性の見極め方、つまり不具な自分達と正常な女性との関係の持ち方を溝口の前で実践して見せる。その方法とは高い石塀の上を歩き、女性の前で飛び降り、転げ落ち、無視した女性に「薄情者！ 俺を置いてゆくのか。君のためにこんなざまになつたんだぞ！」と訴えるものであった。故意に行った状況を理解した溝口はこの場から無意識に駆けて離れていく。駆けて辿り着いた先は金閣寺であり、そこでこのように祈つたのであ

『私の人生が柏木のやうなものだつたら、どうかお護り下さい。私にはとても耐へきれさうもないから』
と私は殆ど祈つた。

溝口は駆け込んだ金閣寺が「濁水を清水に変へてゆく濾過器のやうな作用をしてゐた」と言っており、柏木のような人生は濁水なのである。ここでの人生とは、不具合を利用して童貞を脱却し、人生に参加する権利を手にして現実を知ることである。

柏木の手段を目撃した溝口は恐怖を感じている。金閣は、その恐怖を和らげたものであり、溝口を人生から護ってくれる美しいものである。溝口は無意識のうちに金閣に対して安寧を求めていたが、同時に柏木のような人生に惹かれていた。

生というものに直面したのは柏木の実践の場であつたが、今迄に生と隣合わせになつていたことはある。それは、母親が不貞を犯す様子を見てしまったことと有為子の体を思い続けたことだ。双方において直面することはなく、母親の不貞の際には父親が目を覆い遮断し、有為子についても実際に体を見たことはなかった。さらに、有為子が殺される場面でも溝口は知らぬ間に眠ってしまった為、生に直面し触れ合つてはいなかつたのである。触れられないほど触れたくなり、見られないほど見たい状態の溝口が、柏木から与えられた人生に接近する機会に手を伸ばし始めた。

ある日、柏木に誘われ溝口は女性二人（柏木の実践相手となつた女性・柏木の下宿先の娘）と一緒に嵐山に遊びに行くことに

なった。柏木は溝口に不具な男性の生について持論を展開させ、

正常な女との戯れを得意そうに見せびらかすのである。そして、柏木は下宿先の娘を口説き始めない溝口に対して、二組別々に行動することを提案するのであった。その提案を受け入れた溝口は、娘と関係を持ち「人生」に参加しようとする。試みる。

しかし、金閣はそれを拒んだ。

下宿の娘は遠く小さく、塵のやうに飛び去つた。娘が金閣から拒まれた以上、私の人生も拒まれてゐた。隈なく美に包まれながら、人生へ手を延ばすことができよう。美の立場からしても、私に断念を要求する権利があつたであらう。一方の手の指で永遠に触れ、一方の手の指で人生に触れることは不可能である。人生に対する行為の意味が、或る瞬間に対して忠実を誓ひ、その瞬間を立止らせることにあるとすれば、おそらく金閣はこれを知悉してゐて、わづかのあひだ私の疎外を取消し、金閣自らがさういふ瞬間に化身して、私の人生への渴望の虚しさを知らせに來たのだと思はれる。人生に於て、永遠に化身した瞬間は、われわれを酔はせるが、それはこのときの金閣のやうに、瞬間に化身した永遠の姿に比べれば、物の数でもないことを金閣は知悉してゐた。美の永遠的な存在が、真にわれわれの人生を阻み、生を毒するのほまさにこのときである。生がわれわれに垣間見える瞬間的な美は、かうした毒の前にはひとたまりもない。それは忽ちにして崩壊し、滅亡し、生そのものをも、滅亡の白茶け

た光りの下に露呈してしまふのである。

下宿先の娘と関係を持ち、「人生」に参加しようとする目の前に金閣寺が現れている。現れたのは〈想像の金閣〉であり、生に触れる機会を邪魔したのではなく、濾過器の作用を行い濁水のような人生から護つたのである。生に触れたとき「どうかお護り下さい」と祈つてゐることから〈想像の金閣〉は、その役目を果たしただけである。だが、溝口は欲望に勝つて自分の祈りも忘れてしまつた。生を目の前で阻害するのは、母親の不貞の際に目を覆つた父親の手と役割が同じであると言へる。すると、〈想像の金閣〉にも永遠性があり父親的な存在で絶対的なものである。そして、毒でもあつた。溝口はこの偉大な金閣を破壊しなければ女性と関係を持つこと、生に触れること、すなわち「人生」に参加すること、「人生」を知ることが叶わないのである。その為、嵐山での出来事以降も柏木から女性を紹介されるが悉く失敗に終わり、生としばらく距離を置くことになるのだ。

ある時、柏木は溝口に尺八を贈り、そのお礼として生け花に使用する為の花を金閣寺から持つて來て欲しいと頼んでゐる。寺の中に咲いている花を持つていくことは、盗みを働くことと同義であり、柏木が溝口に罪を犯すよう促してゐると捉えられる。花を柏木へ届けた先で生け花の師匠と出会い、久々に生に触れることになる。この師匠は以前、南禅寺で見た華美な長振袖の白い横顔の女性であつた。生に触れようとすると女性の乳房は〈想像の金閣〉に変化し、関係を持ち生に触れ、「人生」に参加

し、「人生」を知ることが出来ずに終わるのである。

後に溝口と柏木の意見のぶつかり合いから判明することだが、柏木にとって世界を変えるのは認識で、その認識にとつての「美」は女性であった。

女性と関係が持てないこと、生に触れられないこと、「人生」に参加出来ないこと、「人生」を知ることが出来ないことに少しずつ憎しみが募っていった溝口は、「どうして私を人生から隔てようとする？」と独り言葉を吐いていく。

ほとんど呪詛に近い調子で、私は金閣にむかつて、生れてはじめて次のやうに荒々しく呼びかけた。

「いつかきつとお前を支配してやる。二度と私の邪魔をしに来ないやうに、いつかは必ずお前をわがものにしてやるぞ」

この呪詛は金閣寺を燃やすに至る為のトリガーの一つとなっている。段々と「人生」に参加する為に金閣を所有したいという気持ちが生えてきている。また永遠を主張している金閣を瞬間的なものと納得させ、絶対的なものからも崩壊させようとする考えが溝口の中にある。自身の感情と金閣が相容れなくなるとも予感していた。柏木により女性と関係を持ち生に触れ、「人生」に参加し、「人生」を知ろうとしたことが溝口を変えてしまったのである。

徐々に大学に通わなくなった溝口は、後継にしようと思ってい

たが今はそのつもりがないことを老師の口からはっきりと告げられる。溝口から見た老師は世俗的である一方で、身近な現実を目を瞑る性格であった。それは、お金や女性に汚い点、溝口と正面から向き合っていない点が挙げられる。例えば、金閣寺の収入は老師が女性と過ごす為や贅沢な食事をする為に使用され、徒弟たちには冷や飯を食べさせるなど慎ましい生活をさせていた。しかし、溝口は生活の質のことよりも自分が叱責されるべきなのに向に叱責されないことに我慢がなくなっていく。不登校により成績が下がっていることや、金閣寺の花を盗み採り柏木に渡したこともあるが、それ以上に確実に怒られるべき二つの要素が溝口にはある。一つは娼婦の腹を踏みつけ墮胎させた点であるが、この時老師は寺を訴えに訪れた娼婦にお金を渡しこの件を治め、溝口には伝えもせず咎めもしなかった。二つ目は老師の逢引相手である娼婦の写真を手に入れ、新聞を届ける際に間に挟んで持って行ったことである。さらに、返された写真を鉢で切り刻み池に投げ捨てていた。長い間、悪さを黙認され、叱責せず普段と変わらずに接する老師に対して葛藤が生じている。それゆえ「自分のまはりにあるすべてのものから、しばらくでも遠ざかりたい」という痛切な感じが湧き上がってくるのだ。

また、溝口にとって老師は父親代わりの存在になるべきであった。父親が亡くなる直前、共に金閣寺を訪ねた際に父親は老師に息子の将来を託している。溝口にとって老師は父親と同様に絶対的な存在であるべきだった。

「どこかへ、ぶらつと旅に出たいんだ」／「帰つて来るのか」／「多分……」／「何から遁れたいんだ」／「自分のまはりのもの凡てから逃げ出したい。自分のまはりのものがぶんぶん句はしてゐる無力の匂ひから。……老師も無力だ。ひどく無力なんだ。それもわかつた」／「金閣からもか」／「どうだよ。金閣からもだ」／「金閣も無力か」／「金閣は無力ぢやない。決して無力ぢやない。しかし凡ての無力の根源なんだ」(225頁)

溝口は旅に出るにあたり柏木からお金を借りる際、こんな会話をしていた。金閣寺の関係者の中で老師が一番偉く、金閣との距離が近すぎるがゆえに〈建築の金閣〉から「悪しき影響」を受けなかつたのであろう。だから、父親の役割を果たせなかつたのだ。このことから金閣が「無力の根源」と言えるのである。金閣からしばらく遠ざかるうとする溝口は場所を舞鶴に決めて旅に出て行く。舞鶴は溝口の出生地であり、金閣寺の徒弟になるまでを過ごした場所であつた。そして、溝口に放火の姿勢が鮮明に現れるのもこの土地だつた。

突然私にうかんで来た想念は、柏木が言ふやうに、残酷な想念だつたと云はうか？ とまれこの想念は、突如として私の裡に生れ、先程からひらめいてゐた意味を啓示し、あかあかと私の内部を照らし出した。まだ私はそれを深く考へてもみず、光りに搏たれたやうに、その想念に搏たれてゐるにす

ぎなかつた。しかし今までついぞ思ひもしなかつたこの考えは、生れると同時に、忽ち力を増し、巨きさを増した。むしろ私がそれに包まれた。その想念とは、かうであつた。

『金閣を焼かなければならぬ』

三 放火へのカウントダウン

おしなべて生あるものは、金閣のやうに厳密な一回性を持つてゐなかつた。人間は自然のもろもろの属性の一部を受けもち、かけがへのきく方法でそれを伝播し、繁殖するにすぎなかつた。殺人が対象の一回性を滅ぼすためならば、殺人とは永遠の誤算である。私はさう考へた。そのやうにして金閣と人間存在とはますます明確な対比を示し、一方では人間の滅びやすい姿から、却つて永生の幻がうかび、金閣の不壊の美しさから、却つて滅びの可能性が漂つてきた。人間のようにモータルなものは根絶することができないのだ。そして金閣のように不滅なものは消滅させることができるのだ。どうして人はそこに気がつかぬのだらう。私の獨創性は疑ふべくもなかつた。明治三十年代に国宝に指定された金閣を私が焼けば、それは純粹な破壊、とりかへしのつかない破壊であり、人間の作つた美の総量の目方を確実に減らすことになるのである。

「無力の根源」である金閣から逃げ出して、辿り着くのが溝口の「あらゆる不幸と暗い思想」と「あらゆる醜さと力」の源泉、

「裏日本の海」である「裏日本の海」とは舞鶴や由良の海だけではなく、溝口が中学時代を過ごした場所であり、金閣に対する特別な感情が養われた場所というのが重要である。金閣寺を焼くことを犯罪である認識を持ち合わせていた為、善良な思想が生み出されない海を「裏日本の海」として考えている。

「あらゆる不幸と暗い思想」と「あらゆる醜さと力」には有為子に醜さを馬鹿にされた過去、人々の死、絶対性による保護、絶対性の崩壊、吃音による自信のなさ、それ故の無言から生まれた傲慢な内面による残虐の肯定、金閣に対する心酔や特別な感情の誕生が含まれている。全ての根源は父親から語られた、「金閣ほど美しいものは此世にない」という考えから生まれている。金閣が存在しなければ「あらゆる不幸と暗い思想」と「あらゆる醜さと力」は生まれなかっただろう。だからこそ決意したので。結果として突然「『金閣を焼かなければならぬ』」という考えが浮かんできたのだ。溝口は〈想像の金閣〉を正当化する為に〈建築の金閣〉の放火を肯定した。

また、溝口は金閣寺を焼くことを「純粋な破壊、とりかへしのかかない破壊」であると考え、金閣に対して永遠的な美しさも抱いている。ただ、金閣寺は人間の手により意図的に破壊することが可能である。意図的に破壊されることがないかぎり、金閣寺は永遠に存在し続けるのだ。所詮、人間が作りだした建築物である金閣の存在と破壊は人間に委ねられているのだ。それから溝口は破壊することに「美」を感じていた。

そして、旅から金閣寺に戻った溝口は今まで苦痛に感じていた

寺での生活を楽に感じている。それは凡ての根源とも言える金閣寺が燃えてなくなったら、凡ての根源から解放されると考えていたからだ。

これまで「人生」に参加することや「人生」を知ることが出来なかったが、金閣寺を焼くことを決めた溝口はその前に遊郭に足を運び娼婦と関係を持つことが可能になる。これは、放火の約二週間前の出来事であった。関係を持った娼婦はまり子と言い、溝口は「全く普遍的な単位の、一人の男として扱はれてゐた」のである。金閣に対して特別で異常な感情を持ち、放火をするように思えなかっただろう。だが、彼女は溝口が金閣寺を燃やせば重要な証人となるのだ。

私はたしかに生きるために金閣を焼かうとしてゐるのだ
が、私のしてゐることは死の準備に似てゐた。自殺を決心した童貞の男が、その前に廊へ行くやうに、私も廊へ行くのである。安心するがいい。かういふ男の行為は一つの書式に署名するやうなもので、童貞を失つても、彼は決して「ちがふ人間」などにはししない。

今までは女性と関係を持つとした時に目の前に金閣が現れ、「人生」に参加し「人生」を知ることが拒まれていた。生きる為に金閣寺を焼こうとするのは女性と関係を持ち、生に触れ、「人生」に参加し、「人生」を知りたいと考えている証拠である。以前は柏木の手引きより（もしかすると柏木により既に穢されてい

た可能性がある）女性と関係を持つとうとしている。しかし、まり子は娼婦である為、他の男性と関係があったことは否定できないが柏木とは関係がなかった点、溝口が自分の意思で選んだ点が、目の前に金閣が現れずに関係を持てた要因の一つと言えらるう。まり子とは数回関係を持つことに成功し、彼女の前に金閣が現れることもなく、乳房も金閣に変化することない唯の肉のまま、触れることが出来た。

溝口が「私は生きるために金閣を焼かうとしてゐる」と言っているのは、世界を変えるのは行為だからである。「美」に対する行為は破壊である。金閣寺に火を付け破壊し廢墟になるまで溝口の世界は変わらないのだ。しかし、柏木は溝口にこのように語っていた。

「俺は君に知らせたかつたんだ。この世界を変貌させるものは認識だと。いいかね、他のものは何一つ世界を変へないのだ。認識だけが、世界を不変のまま、そのままの状態、変貌させるんだ。認識の目から見れば、世界は永久に不変であり、さうして永久に変貌するんだ。それが何の役に立つかと君は言ふだらう。だがこの生を耐へるために、人間は認識の武器を持つたのだと云はう。動物にはそんなものは要らない。動物には生を耐へるといふ意識なんかないからな。認識は生の耐へがたさがそのまま人間の武器になつたものだが、それで以て耐へがたさ少しも軽減されない。それだけだ」

柏木が語るに世界を変えるのは認識であつた。しかし、溝口が女性と関係を持つて生に触れて、「人生」に参加して「人生」を知つても世界は変わらなかつた。やはり、溝口が世界を変え、「美」を明らかにするのに必要なのは行為である。

溝口は女性との関係で生にぶつかり、自らを殺めようと死にぶつかる。最後には「生きよう」と再び生にぶつかるのだ。

溝口は女性と関係を持ち「最初の行為が、想像裡の歓喜に比べていかにも貧しかつた」といふ感想を抱いている。これは溝口が初めて金閣寺を目にした際に、「大そうあつけな」いものであつたと感じていることと同じである。《建築の金閣》も女性との関係も想像には屈するしかないのだ。既に亡くなり数年経っている有為子と官能の悦びを味わつたことは、《建築の金閣》が灰になることを期待し《想像の金閣》を美しいと考えることと等しいと言える。

一九五〇年七月一日の夜が訪れ、放火という行為の一步手前にいる溝口は数年の間に積もらせた「美」との思い出を強めていくのである。

金閣は雨夜の闇におぼめいてをり、その輪郭は定かでない。それは黒々と、まるで夜がそこに結晶してあるかのやうに立つてゐた。瞳を凝らして見ると、三階の究竟頂にいたつて俄かに細まるその構造や、法水院と潮音洞の細身の柱の林も辛うじて見えた。しかし嘗てあのやうに私を感動させた細部は、ひと色の闇の中に融け去つていた。

が、私の美の思ひ出が強まるにつれ、この暗黒は恣まに幻を描くことのできる下地になった。この暗いうづくまつた形態のうち、私が美と考へたもの全貌がひそんでゐた。思ひ出の力で、美の細部はひとつひとつ闇の中からきらめき出し、きらめきは伝播して、つひには昼とも夜ともつかぬふしぎな時の光りの下に、金閣は徐々にはつきりと目に見えるものになつた。これほど完全に細緻な姿で、金閣がその隈々まできらめいて、私の眼前に立ち現はれたことはない。私は盲人の視力をわがものにしたかのやうだ。

〈建築の金閣〉は〈想像の金閣〉を完成させる為の下書きではないのだ。〈建築の金閣〉が存在している場所（暗黒）に溝口は〈想像の金閣〉を描くことが出来る。先出の場面から、溝口に必要なのは〈建築の金閣〉ではなく〈想像の金閣〉であることが分かる。何年間も溝口が金閣に抱いていた特別で異常な感情は、目を瞑っていても〈想像の金閣〉の美しさに感動する為に必要だつたのだ。「美」の点検を行い「美」の核心を見た、最終的な結論が「美が金閣そのものであるのか、それとも美は金閣を包むこの虚無の夜と等質なもののかわからなかった。おそらく美はそのどちらでもあつた。細部でもあり全体でもあり、金閣でもあり金閣を包む夜でもあつた」のである。

溝口は「美」へ感情が強まった状態で真夜中に自分の荷物を纏め金閣寺に運び、燐寸に火をつけ藁に火を移したのである。炎が燃え上がる中、ここで死のうと考え究竟頂の扉に手をかけるも鍵

がかかつており、扉が開かなかつた。必死に扉を開こうとするも開かないのである。そして「ある瞬間、拒まれてゐるといふ確かな意識が私に生れたとき、私はためらわなかつた。身を翻へして階を駆け下りた」のだ。溝口は拒まれてゐると意識しているが、これは溝口自身の存在が拒まれているのではなく、死を拒まれてゐるといふことである。「一方の手の指で永遠に触れ、一方の手の指で人生に触れることは不可能」である為、不完全な「美」と完全な「美」を求める者が共に死ぬことは相容れないのだ。つまり、永遠的なものの中で死ぬことは許されないのだ。

こうして死ぬことを拒まれた溝口は自らを殺める手段を手離し「生きよう」と思うのであつた。

おわりに

溝口から金閣に向けられる特別で異常な「美」の感情についてテクストを通して見たことから述べてきた。父親からの影響で金閣に「美」を求めた少年は、〈建築の金閣〉との関わりを通して〈想像の金閣〉を膨らませていく。この時、溝口が触れて良い情報か否かを判別する父親は絶対者、或いは絶対者の通訳という役割になつていた。

幼少期から青年期までの時間をかけ、「美」を明確にする為に導き出した方法は〈建築の金閣〉を燃やし破壊することであつた。燃やすことで、〈建築の金閣〉に邪魔されることなく〈想像の金閣〉を見ることが可能になり、完全な「美」へと変化した。破壊すること、〈建築の金閣〉は廃墟となり、視覚を失つても

存在を感じられる〈想像の金閣〉の「美」が完成したのだ。国宝である金閣を意図的に燃やすことは、放火事件として擁護の仕様がなない犯罪だが、溝口にとっては正当な行為だったのである。だから、溝口はカルモチンと小刀を投げ捨てて「生きよう」と思い、〈建築の金閣〉を破壊することで溝口は「美」という難題の答えを導き出し「生きよう」と思えたのだ。

主人公溝口から見えた『金閣寺』における「美」とは、燃やした〈建築の金閣〉の形骸から〈想像の金閣〉を見ることである。

この世で一番美しい〈想像の金閣〉が完成し、溝口はようやく幸福に生きることが出来るのだ。

なお、底本は『決定版 三島由紀夫全集6』（新潮社）とし、本文引用は全て同著に拠る。その他の作品から引用する場合はその都度記述する。

参考文献

- 内海健 (2020) 『金閣を焼かなければならぬ 林養賢と三島由紀夫』、河出書房新社
- 酒井順子 (2010) 『金閣寺の燃やし方』、講談社
- 佐藤秀明 (2020) 『三島由紀夫 悲劇への欲動』、岩波新書
- 佐藤秀明 (2002) 『三島由紀夫 『金閣寺』 作品論集 近代文学作品論集成⑩』、クレス出版
- 佐藤秀明編 (2018) 『三島由紀夫紀行文集』、岩波文庫
- 平野啓一郎 (2021) 『NHK 100分 de 名著 2021年5月』、NHK

出版

三島由紀夫 (1960 / 2020) 『金閣寺』、新潮文庫

三島由紀夫 (2001) 『決定版 三島由紀夫全集6』、新潮社

金閣寺一臨済宗相国寺派

<https://www.w.shokoku-ji.jp/kinkakuji> (参照 2024-1-9)

(うえた・あかね 本学大学院修士課程)